

A Study on Guidance in High school

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24764

高校における生活指導研究(VI)

諸岡康哉*・生活指導研究グループ**

本研究グループは、マカレンコの一連の著作の検討を基礎にしながら、一方では、自分達のかかえている高校現場での生活指導実践の検討をおこなってきた。(その成果については、『教育工学研究』第9、10、11、12、13号に掲載)

本年度は、マカレンコ家庭教育についての論文をとりあげ、検討をくわえた。マカレンコには、家庭教育についての論文はいくつかあるが、その中でも彼の妻、ガリーナ・スタヒエブナ・マカレンコと共同で書いたたった一つの作品といわれる「親のための本」を中心的に検討した。

以下の論文は、本研究グループでの一年間にわたる集団討議・検討の成果を、1. 親子関係論、2. 家族構成論、3. 性教育論のテーマにもとづき、寺島、松浦、宮島がそれぞれ責任執筆し、それを諸岡を中心としたグループ員らが加筆・修正したものである。

(なお、論文のなかで頁数のみ表記されている場合は『マカレンコ全集第V巻』明治図書、の頁を示している)

1. 親子関係論

——自己犠牲的母親像と親の権威について

はじめに

ここでは、マカレンコが理想とする家庭像の中での親子関係論を明らかにしていきたい。

その際、マカレンコはひとつは、『マカレンコ全集』第V巻第8章(以下ページ数だけ示す)の中で、自己犠牲的母親像を提示し、それを批判する形で理想的母親像を浮かび上がらせている。ふたつ目は親の権威についてで、6章で、子どもたちの遊びやけんかをめぐって各家庭の対応や、家庭そのもののあり様から、家庭集団内の権威、規律、自由について説かれている。これらのことによって、親の権威とは何なのかを詳しく述べている。以上二つの観点からマカレンコが理想とする親子関係論を明らかにするのが、ここでの第一の目的である。

また1930年代に書かれたこの書物が、現代の家庭論として決して古くないばかりか「権威について」の部分は、なにも家庭論としてだけではなく、現代の学校における「教師の権威について」と置きかえて読んでも役に立つ部分が非常に多い。さらに、自己犠牲的母親をめぐっての部分は、現代の母親・父親のおかれている労働状況ともからめて考察する必要がある。これらの点についても考察したいというのが第二の目的である。

(1) 自己犠牲的母親＝ヴェーラをめぐって

ヴェーラ・イグナーチェヴナ・コーロボフは38才。工場の図書館の有能な司書として働いているにもかかわらず、家庭においては古い形の女性から抜け出せず、盲目的に家事労働に従事し、夫や子ども達に尽くしてきた。つまり、彼

* 諸岡 康哉 金沢大学教育学部

** 穴田 述 石川県立寺井高校

寺島美紀子 石川県立松任農業高校

松浦みどり 石川県立金沢向陽高校

宮島 公夫 金沢市立工業高校

女は本のこと、家族のことだけを考え、自分のことは決して考えない。

ところが、司書としての働きが認められ、賞を贈られることになる。そのことがきっかけとなり、娘のタマーラとの葛藤を経て自立していく。

賞を何にしてほしいのかという質問に対して、ヴェーラはボロのスカートとボロの靴をはいていながら、娘タマーラがほしがっている「茶色のくつ」を要求することが当然だと思うほどの自己犠牲ぶりだった。しかし結局ヴェーラ本人のための服地が贈られることになり、受賞式である作家から次のようなことばを受ける。

「ヴェーラ・イグナーチェヴナのような人はおどろくほどひかえ目で決して自分のことを考えたりしません。自分のしごとのことを考えるのです。(中略)自分のことを考えて下さい。幸福に生きて下さい。美しく着飾ってください。そうする義務があります。なぜなら、ほんとうに働く人がいい生活をするためにこそ、わたしたちの革命がなされたのであるからです。」(V巻、P. 247)

これは、マカレンコが作家という姿を借りて、ヴェーラに、即ち、自己犠牲的に生きがちな母親に対して語っているのであろう。ソビエトにおいてロシア革命を経験した後「労働者である彼女は、この生気にみちた旋風を歓迎しましたが、彼女は一瞬たりと、こまごました連続から離れることはできませんでした」(P. 231)

ここに述べられている彼女だけではなく、現代のように共働き夫婦が増えていても、家事の全てを母親がするというこの様相は大して変化がない。したがって「働く人がいい生活をするためにこそ」ということばが、現代日本において、なお一層鮮烈にきこえる。

このことばによって、ヴェーラは「みちみち美しい服を縫って着るためのまじめな決心が自分の中にあるということ、ある種のおどろきをもって、認め」、「それと同時に決然と新しい形象が彼女自身に生じ」た。「それはなにか新し

いヴェーラ・イグナーチェヴナで」あった (P. 252)。桜色の絹をまとして、「いっそう美しく、若々しく、幸福そうに見えた」と同時に、「いっそう価値となにかしらの真実」を認めたヴェーラは、「このボロぐつが彼女をばかりでなく、彼女が奉仕している事業を侮辱するかもしれないことは、疑う余地も」ない (P. 252) と思いあたる。

その結果、娘のタマーラと息子のパヴルーシャは「被後見人としてよりも、興味ある人間として」(p. 253)現われたし、帰宅して散乱している食器の後片づけも、「争う余地のないもの」すなわち「当然、彼女がやるべきもの」としては、姿を消す。

しかし母親に贈られた桜色の絹をほしがる娘タマーラは依然として「親はいま、子どものために生きなければならないのよ」「かあさんは年でしょ、でもわたしは若い、生きたいのよ！」(P. 254)と叫びくつや服をふりまわす。それに対して労働委員会の一員であるアンドレイ・クリモヴィチはヴェーラに対して次のように言う。

「あなたはいったいだれをそだてているのですか？だれをです？敵をやしなっているのですか？」(P. 255)「それにこんな人間はだれにとっても必要なんですか、考えて下さいよ！あなただけが不愉快だ、家庭の問題だ、と思うのでしょ？彼女は食事をする、食器はそのまま。なんという屑のような人間なんです、自分のあとかたづけをする代わりに、なにをしているっていうんです？ガラクタをあなたの顔に投げるのでしょ？」ところがそれはあなたが自分の高価な労働でかせいだものですよ！」(P. 256)

ヴェーラとタマーラとの葛藤の山場での、このアンドレイ・クリモヴィチの介入によって、タマーラは食器を洗い出す。思い出したように立ち上がりそれを止めようとしたヴェーラをアンドレイはすわらせる。「ヴェーラはかれのむきだしの毛むくじらの手に特別な敬意を感じ」(P. 257)る。

タマーラに食器を洗わせている旋盤工アンドレイに対してヴェーラは次のように思う。「旋盤の職場から鉄の把握と単純な聡明さを人はもってくる(中略)彼女のまえて、まるで大きな幕の片隅がひらかれたかのようでした。彼女の幕のうしろにはほんとうの闘争の火の部分を見ました。それに比べると、彼女の図書館の作業は、ちっぽけなふまじめなものに彼女には思えました。」(P. 257)

しかし彼女の図書館での仕事は、決してちっぽけなものではなかった。実際に火こそ使わないかもしれないが、彼女も「火の仕事」をやっていた。社会建設の事業にとって、図書館は旋盤同様に大切なものである。

そしてさらに、彼女は部下の司書たちに「いくらか厳しいことばをいうことがぜひとも必要」であることを知っていた。それは実に簡単に単純なことであった。が、その同じことを家庭でもやるのが、困難ではあるが、子どもの教育にとって実に重大な意味があることを、彼女は発見する。

アンドレイに「敵を育てているのですか」といわれたことが、ヴェーラにとっての発見であり、「タマーラが注意深くかれに耳をかたむけ、口答えもせず、怒りもしない」でいることが、また新しい発見だった。そして、なぜ教育があんなに簡単にうまくいくのか解明の必要が生じたのだった。

家で彼女は「ただびくびくした、無意味な、有害なせわやきだけをたよりにして、動物的な盲目的な本能にたいしてへつら」っていた。しかし、図書館では彼女は「愛情のうしろに、人間の推移をみることができ」、「ことばで、視線で、暗示で、調子で、やさしく、厳しく、おどろくほど素早く、おどろくほど経済的に、人間を助けることができた」(P. 263~4)。したがって、娘タマーラが、自分の同僚のひとりとして映るように努力して話すことが、彼女にとっての出発だった。新しい桜色のドレスが仕上がって、それをはじめて家庭で着た時に、彼女は

母親としての価値、妻としての価値を正当な形で手に入れたのである。

こうして最後にマカレンコは「すべてを子どものために、というのは、全く許しがたい時代錯誤的なスタイルであり、自己犠牲的母亲は、自分の子どもを自ら暴君に育てあげることになる。」「わたしたちの母親のしごとと生活は、盲目的な愛情にむけられてはなりません。大きな、前向きの、ソビエト市民の感情に向けられねばなりません」(P. 260~7)とまとめている。

マカレンコは自己犠牲的な母親は、母親自身が動物的な世話やきに自分の家庭生活をうばわれ、急速もなく喜びもないだけではなく、今度はその母親の犠牲の上にそだてられると、子どもは、搾取社会でのみ生きることのできるような暴君、圧政者にされてしまっていること明らかにしている。そして、だからこそ、こうした母親の自己卑下に抗議すべきだといっているの(1)である。

(2) 家庭規律のあり方の親の権威

第(1)節では、第V巻第8章を中心として家庭教育とりわけ母親のあり方を論じたが、この節では第6章を中心に家庭規律のあり方と親の権威について考えてみたい。

第6章では、子どもたちの遊びをめぐる各家庭の対応のし方や、家庭そのものの様子を四つの家庭の例に描いている。理想と反対の家庭には、①親子は友だちでなければならないという信念で教育し、その結果、親の権威の喪失した例、②父親は権威をもたねばならぬとばかり、その権威の高みから、教育活動のためにめったに下りでこないため、結果的には子どもを野蛮な状態に放り出している例、③暴力が支配していて、父親は子をなぐり、子のものまで取ってしまうし、家はそうじのこん跡がない。暴力が子どもを悪くしてしまう例、が描かれている。

それに対して理想的に描かれている家庭での子どもは4才になった時に、すでに家庭のしごと(社会的責任)を与えられている。それは父

親の長ぐつを用意することや、本だなのかたづけ、花の水やり、新聞の整理というものであった。6才の時に、父親から建築材料の入った箱の贈られ、家庭での社会的責任と自分の夢の世界を彼はつくり出す。しかし、子どもたちの同志の戦闘ごっこで、今まで以上の喜びを体験する。

そういう子どもの心の動きを実に細かく描写して「子どもの生活はおとなの生活より、くらべものにならないほどゆたかです。しかしそれだけに、その振動は壮麗であるばかりでなく、危険でもあります」(P. 190)。そしてとくに子どもの生活のもっとも重要な、決定的な時期が、「子どもがあたたかい家庭の巢から広い道に出るときであり、子どもがはじめて集団にあるとき、つまり、子どもが市民となるときです」(P. 189)とし、そのときに親が子どもの生活に無関係であるのではなく、参加していることが大事だ、と述べている。

第6章で提示された子どもたちの戦闘ごっことその家庭の様子によって、マカレンコは、これら「生活の小さな小さな断片」が、毎日、家庭で数限りなくおこっていて、それに対して我々は大して注意を払っていないが、まさにそういう「平凡な断片」をとらえての教育こそが、子どもたちに最も重大な意味をもっていることを語っている。そして、これらのことを子どもに伝える時には、「頑迷さでなく、怒りでなく、叫びでなく、哀訴でなく、嘆願でなく、おだやかな、まじめな、事務的な命令」ができなければならない。そしてそれこそが「家庭規律の技術の外面的手段」(P. 191)であって、親のほんとうの権威をつくり出すものである。したがって親は「命令を出すことを学ばねば」ならない、と言う。(ゴシックは寺島)

この指摘は、親にとってだけでなく、学校の教師にとっても重要である。『親のための本』を読んできて、「親は」とマカレンコが言っているところのほとんどを「学校の教師は」と読みかえている自分を発見する。とくに、この「親の

権威について」の部分は、全く「学校あるいは教師の権威について」と読みかえることができる。以下、その点について考察したい。

(3) 権威とは何か

——現在の学校の生徒管理のあり方

この巻の後半に、マカレンコが親たちに向かってなされた「親の権威について」という講演がのせられている。(P. 316~325) その冒頭で、「親の権威がどこからくるか? それはどうつくられるか?」とマカレンコは聴衆に問い、次のように述べる。

「権威をまちがった土台の上にきずいている親は、子どもが自分のいうことをきくようにと、それにけんめいになっていて、それがかれらの目的となっています。ところがじっさいは、それがまちがいなのです。権威と従順は目的とはなりえません。目的はただ一つ。それは正しい教育です。(中略)子どもの従順は、せいぜいこの目的にいたるみちの一つにすぎません。教育の真の目的について考えていない親にかぎって、従順のための従順をかちとろうとします。子どもがおとなしいほうが、親としては安心しておられるわけです。

ほかでも古いこの安心こそがかれの真の目的なのです。しらべてみるといつも、安心も従順もながもちしないことがわかります。まちがった土台の上にきずかれた権威は、ほんのちょっとしか役にたたず、やがていっさいがっさいくずれさってしまい、権威も従順も、跡かたもなくなってしまうのです。親が従順をかちとるけれども、そのかわりそれ以外の教育の目的がごとくお払い箱になることがしばしばあります。」(P. 317)

引用がずいぶん長くなったがそれは、以上の引用の「親」を「学校あるいは教師」とかえて読んでみてほしいと思ったからである。

そしてここでマカレンコは十種類のまちがった権威をあげている。列挙すると次のようである。

- ①おさえつけの権威
- ②へだての権威
- ③ごうまんの権威
- ④知ったかぶりの権威
- ⑤へりくつの権威
- ⑥愛情の権威
- ⑦おひとよしの権威
- ⑧友情の権威
- ⑨買収の権威
- ⑩他、笑いの権威、博識の権威、「親分はだ」の権威、美の権威

このうち、とくに学校あるいは教師の権威だと思われていたり、また、そのように生徒規則がつくられていることについて、とりあげていきたい。

①おさえつけの権威は、家庭では父親がとりつかれやすく、のべつ大声でどなったり、むやみに暴力や罰を与えたりする類いの権威である。それは何ひとつ教育せず、ただ、こわい父親を敬遠することを子どもに教え込むだけで、子どもをうそつきにし、臆病にし、その反面残酷な心を子どもにうえつけるだけだという。(P. 317～8)

私自身が見知っている限りでも、かなりの学校がこの「おさえつけの権威」によっているように思われる。生徒指導課の生徒管理のあり様はまさにそうである。が、その他にも、たとえば休み時間に生徒を呼び出す教師のば声がそうである。生徒の名前が呼び捨てで、かつ、最後に「いますぐ、来い！」式の呼び方が多い。そこまでひどくなくても「教師の声色で、どんな話かわかる」「あんな呼び出し方、やめてほしい」という生徒の声を多くきく。そして、「きこえなかった」ことにして行かない生徒も多い。すると、徐々に放送のボリュームが上がる。なんだから、チャップリン「独裁者」のヒンケルの放送を思い出してしまう。そうすると「あとがこわいから、しょうがない、行くか」と生徒。その反動で、弱い者へのいじめが学校で横行することを、ある生徒は次のように書いている。

「まず今現在、中学校などでいじめの問題があるが、それは教師や学校に問題があると思う。それは、まず、教師が権力や力などを利用して生徒に圧力をかける。その結果、生徒に不満がたまり、力など地位的に強い者がその生徒にうつぶんばらしに、そういう弱い者をいじめる。」

マカレンコは、この権威を「もっとも野蛮な種類の権威」であり「教養のない親にかぎってみられるもの」だと言っているが、これが学校という「教育」の場で最も一般的であるというのは、一体どういうことであろうか。

④知ったかぶりの権威とは、子どもというのはすべからく親の一言一句をかしまって拝聴すべきで、親のことは神聖なるものであると信じこんでいて、子どもの一挙手一投足に秩序と法の違反を見つけ、新しい法律や指令をひっさげて子どもにつきまとう親のあり方である。

(P. 319)

これが学校ではどうなるか。たとえば生徒指導課が生徒の服装規定として細かくあげている規則がそうである。ある学校では黒ソックスは認められているのに、他の学校では白。ある学校が肌色ストッキングしか認められていないのに、他の学校では黒ストッキングは「可」、というようにその認められない理由が、合理性、正確さ、共通性、確実性を欠いている。しかし、学校は「一旦、きまった規則だから」という理由で、それに固執する。また生徒がこのような理由をあげて不平を言ったり批判したりしても聞く耳をもたない。そうしているうちに、生徒の成長すらも見えなくなっていく教師が増える。(この学校における規律についての考察は、諸岡康哉・生活指導研究グループ「高校における生活指導研究(III)」金沢大学教育学部附属教育工学センター『教育工学研究』第11号、1985年所収の松浦みどり「規律・レジムに関する考察」〈P. 1～6〉がある。)

⑤へりくつの権威とは、訓戒こそが教育者の知恵のみせどころだと信じこんでいるところにあるが、子どもは親のへりくつの中にひとかけ

らの権威もみないというものである。(P. 319)

これは、学校では、規則違反をした生徒に対しての指導課や学級担任のお説教である。教師は心をこめて、コンコンと話しつづけるが、生徒の方は、黙って耐えてきいていさえすれば、役目がすむと思って、じっとうつむいてすわっている。しかし、これは子どもの意識にほとんど跡をのこさず通りすぎる。

お説教がおわるのをジッと待ち、教室に帰れば、仲間が「よく帰ってきた」とばかりに、大歓迎してくれる。これでは教師のお説教は何の役にも立たない。これは、マカレンコのコローニャでの場合と全く正反対である。

コローニャでは、マカレンコからの呼び出しを受けるだけ(手紙という形で。その例はVI巻P. 174~175)。しかし、まわりのほとんどのコロニストから叱責をうけ、マカレンコのところに行くまでに、反省はすっかり終わってしまっている。したがって、指定された時間にマカレンコの室に行くと、「帰ってよらしい」ということばをきくだけなのである。

それでは、真の権威とは何なのか。

親の権威の主要な土台についてマカレンコは、それは、親たちの生活しごと、市民としての風格、行為であるとする。そしてその権威の根は、第一に、子どもをよく知っていることであるとする。毎日なにをしているのか、何に興味をもっているのか、何が好きで何がきらいか、何をのぞみ、何をいやがっているか、ということを親が知っていることを、子どもは好み、そういう親を尊敬するのだと言う。(P. 323)

しかし現在の学校では、子どもをよく知ることよりも、学校の規則に子どもをあてはめようとする動きの方がはるかに強い。「子どものやりたいことをやらせていたら、何をするかわからない」というわけである。これでは子どもが教師を尊敬し、信頼を寄せるはずがない。

子どもをよく知っていれば(知識の権威)そこから、援助の権利、慎重で注意深い指導の権威が生まれる。(P. 324)

第二に重要な根として、マカレンコは責任をあげる。自分の子どもが、大きくなってりっぱな市民、りっぱな人間にならねばならず、その目的達成に対して自分が責任を負っているということが土台である。(P. 324)

学校では教師が、生徒が各教科のどこをわからないのかを発見し、しっかりと学力をつけてやること、あるいは精神的な苦悩に対しても、まず教師がそれを知ることができねばならない。しかし現実には、輪切りの学校間隔差、それでも足りずに習熟度別と称するクラス分けで、生徒が未来の主権者たるにふさわしい学力を身につけさせることになっていないのではないかという危惧をもつ。

精神的苦悩についても、学校がその原因をつくり出しているときえ言える状況がある。服装検査等にはじまる合理性、正確さ、共通性、確実性を欠いた「指導」が、どれほど子どもたちの心を苦しめているのかを、教師は知るべきである。服装検査についてある生徒は次のように語る。

「服装検査の時だけ、ズボンをはきかえたり、髪を少し切ったりした方が、うまく立ち回れるのはわかっています。しかし、僕はそんな裏表のある人間になりたくありません。服装検査は僕たちに、裏表のある人間になれということを教えるだけです。」

今、教師批判がさかんに行われている。以上みてきたように批判されるべき学校・教師も少なくない。したがって私たちの自身も、自己批判すべきことはきちんと自己批判し、他方へ、行政レベルへはきちんと要求しつづける(例えば40人学級)ということが、我々教師の責任であるのではないかと思うのである。

おわりに

教育が、国家のその時々支配者層の要求によって変化するものであることは、日本の戦前戦後の教育法の変化をみれば一目瞭然である。あるいはまた1960年代の「期待される人間像」

や、今の臨教審に見るように、経団連等財界の教育への要求は、「すべての子どもに未来の主権者としての学力を」というのではなく、財界に役立つ「少数エリート」を望むというものである。

教育が、このような国の政策や支配者層から強い影響を受けるものである以上、資本主義社会である日本で、社会主義社会であるソビエト社会におけるマカレンコの意見を、そのままストレートに実現することは不可能である。しかし、だからこそ逆に、未来を担う子どもたちには、新しい社会をつくり出すことのできる感性和理性を育てたい。そのために、マカレンコの家庭論から学ぶところが少なくない。このことは、これまで検討してきたとおりである。

他方、マカレンコは「親の権威」について、次のようにも述べている。

「権威は、親そのものになければなりません。(中略)その根底にあるのは、あくまで一つのことなのです。すなわち、親の品行です」(P. 132)そして「親自身がソビエト国家の市民として、完全な意識的な、道徳的な生活をしなければならぬ」(P. 133)

さらにまた、「家庭教育」について、次のように主張している。

「教育というしごと、とくに家庭集団のしごととのふかい意味は、ただ階級なき社会においてのみ可能であり、かつ、人間をして将来の完成のための闘いによびますことのできるような、道徳的な高さにみちびくことのできる人間的な要求を教え、学ばせることにあります」(Pp. 31~32)

「わたしにとって要求とは(中略)社会主義社会の活動家である者のための利益をあらわしているのです。」(P. 32)とする。

このようにしてマカレンコは全面的にスターリン体制の中にあるソビエト社会を肯定的にとらえ、また『塔の上の旗』でも、スターリンの像をコロニストたちがどのように大切にとりあつかったを賛美に近い形で描き出していさえす

る。しかし現在、ソビエトがゴルバチョフ政権にかわり、スターリン体制以来の矛盾が次々に批判されるに至って、いくつか疑問点がでてくる。

① マカレンコは全面的にスターリンを支持していたのか、もしそうであるとしたら、スターリン体制のあやまりの中で、どのように教育がなされ、しかしなぜマカレンコの教育は成功したのか。

② それとも、マカレンコの教育は、スターリン体制の中で、誤りをまぬがれなかったのか。とすれば、その誤りは『教育詩』や『塔の上の旗』では、どのように現われているのか。

③ あるいはまたマカレンコが、実は批判的にスターリンをとらえていたのか。つまり当時、それを公けにすることは許されなかったので、表面的には賛美しているようなポーズをとっていたのか。もうそうである⁽²⁾とすれば、どのような批判の観点に立っていたか。

以上、疑問点をあげればきりが無い。しかし、マカレンコが、教育においては社会のあり様が重要な鍵であると、くどいほど述べているので、この点に触れざるを得なかったわけである。スターリン以来の体制的矛盾への批判が行われつつある現在、マカレンコの専門的研究者による今後の研究に期待したい。

<注>

(1) 現在の日本における状況は、母親がヴェーラのように目覚めることによってのみ変わらうるものでないことは言うまでもない。この点はマカレンコが何度も言及しているように、ソビエト社会が資本主義社会と異なる社会体制をとっており、その中で労働のあり方が根本的に違うという点を確認しておかねばならない。

しかし、一方、たとえ社会体制がどのように変わっていても、母親、父親、娘、息子といった、各個人の中の意識の中に、古い社会関係の体質が必ず尾を引くであろう。したがって、その点については、独自に追求して

いく必要があろう。

- (2) ①—③の疑問点はさておいても、レーニンとは違い、一切の私営活動活動を禁じ、全面的な計画経済をとっていたあるスターリン体制の中で、マカレンコのコロニーヤだけ(?)が、生産→販売→購入の一切が自由に行えていたという事実ですらもが不思議だと思える。なぜこのようなことが実現していたのか。この点は、本稿の「親子関係論」から焦点がずれるので、本論からはおいたが、別に検討する要する興味深い問題であるという指摘にとどめておきたい。

2. 家族構成論 ——「一人っ子」システム批判

はじめに

ここでは、マカレンコが理想とする家庭像の中での家族構成論を明らかにしていきたい。

その際、マカレンコは第5章の中で「一人っ子」の家庭の問題点を提示し、もっとひどい有害なものとして、捨てられた子どもの状態は孤児の状態よりもっと複雑で危険であると述べている。これらの対置する形で、第3章に13人もの子どものいる家庭が、理想的な家庭として描かれている。

マカレンコは、これらの三つの家庭（一人っ子の家庭、離婚した家庭、子だくさんの家庭）を対比しながら、理想的な家庭のあり方の明らかにしている。そのことを手がかりとして現代に生きる私達の家庭、学校のあり方を考えてみたい。

(1) 「一人っ子」のヴィクトル

ニーナとピョートルには一人息子のヴィクトルがいる。ヴィクトルが2才になった時、ニーナは夫に二人目の子どもが欲しいという。しかしそれは、ヴィクトルを並はずれた秀才に育てあげようとピョートルの意見で退けられてしま

う。ピョートルの期待通りヴィクトルは急速に成長し、学校の成績は抜群で、10学年に飛び級し、17才で大学の数学科に入学する。そしてたちまち、その天分と科学の本質を突く力と博識で教授をびっくりさせはじめた。

両親は息をのみ、感動したのだが、逆の過程がはじまっていたことに気づかなかった。つまり、息子が親の生活を規制しはじめたのだった。ピョートルの書斎がヴィクトルのものとなり、両親は息子の勉強の邪魔にならないように、爪先で歩き、小声で話すようになる。ヴィクトルは親にあいさつさえせず、母親がかれのために風呂の用意をしても決して「ありがとう」と言わない。また、父親には一着の着古した服しかないのに、ヴィクトルは二着も新しい服をもっている。これらのことに、両親も息子も何の疑問も感じていない。

事態はさらに深刻となり、ヴィクトルが大学4年になった時、ピョートルが胃かいようであることがわかる。手術をするか否かで悩んでいる時も、重い発作で苦しみ、薬局へ行くことを頼んでも、ヴィクトルは平気で劇場へ出かけていく。

マカレンコはこの家庭を例にとって、はっきりと次のように述べている。

「ひとりっ子に対する両親の集中的な愛情は、おそろべきあやまちなのです。

兄弟、姉妹がいない——上も下もない——ということは、当然、せわの経験もなく、愛情や手助けの経験もなく、模倣もなく、尊重もなく、それにまた、分配ということ、共通の愛情、共通の緊張という経験がないことです。」(Pp. 97~98)

さらにマカレンコは言う。

「ひとりっ子の家庭にも幸福な場合はありうるのです。なみなみなならぬ両親の敏感さというもの、ありえます。それは正しいトーンをみつけ、ある程度、兄弟姉妹の代わりとなる友人環境を組織する可能性を、両親にあたえるでしょう。」(P. 97)

息子のきげんを図ってオロオロするニーナやピョートルを私達は笑えるだろうか。マカレンコはひとりっ子の教育に成功するには、なみなみならぬ配慮が必要なのだという。しかし、ひとりっ子でなくても、何人か子どもがいても、このヴィクトルのように育ってしまう可能性はいくらでもある。そうならないためには、親は子の奴隷になることな、子の人生に沿って生きることなく、自分の人生を生きることが必要なのだと思う。

(2) 捨てられた子どもイーゴリ

エフゲーニヤ(33才)は、夫ジュエフとオーリヤ(5才)、イーゴリと平穏な日々を送っていた。ところがある日突然、次のような手紙を受け取った。

「ジュエフ！もうこれ以上きみをだましたくない。わかるだろうと思うが——最後まで誠実でありたいのだ。わたしはアンナ・ニコラエヴナを愛していて、いま一緒に住んでいる。子どもには毎月200ルーヴリを送るつもりだ。ごめん。いろいろとお世話になった。H」(P. 101)

エフゲーニヤは、自分達が古新聞でくるんで捨てられたように思い、やりきれない日々を過ごすのだった。200ルーヴリを惜しむ夫からの手紙で子ども達は夏休みを田舎で過ごすのだった。しかしそれもうまくいかず、田舎から帰ってからは、イーゴリの性格が変わり、顔の表情まで変わるのだった。イーゴリのことで学校の校長から呼び出しをうけるようにまでなった。

このような家庭は、現代の日本にも数多くある。実際、私の担当しているクラスでも7人の生徒が離婚家庭であり、その中には生活上問題のないしっかりした生徒もいるが、ひんぱんに問題を起こす生徒、深い問題をかかえる生徒は、離婚家庭の生徒に多い。生活の基盤となる家庭の重要性を日々感じているところである。

この章のエフゲーニヤは、隣の家の夫が妻をひどく虐待したという事件を新聞に投書し、彼女個人が社会的注意の焦点に立ったことから自

分を取り戻し、家庭も正常化していきのだった。母の自立が子どもに良い影響を与えていった。

マカレンコは、この章の最後を次のようにしめくくっている。

「家庭集団の完全さと統一は、よい教育の絶対的条件です。それは養育者や『一人っ子の原則』により犯されるばかりでなく、両親のけんか、父親の専制的残忍さ、母親の軽率な弱々しさによっても犯されるのです。

自分の子をほんとうに正しく教育することを欲するものは、この統一を護らなければなりません。それは子どもにとってばかりでなく、両親にとっても不可欠なものなのです。」(P. 103)

また、マカレンコは論文「子どもの教育について」の中で「家庭教育の一般的条件」に触れ次のように述べている。

「なにかの理由で夫婦わかれをする親たちにぜひともおねがいたいことは、夫婦げんかや不和の状態のとき、もっと子どものことを考えてほしいことです。どんな不和でももっと慎重深く解決することができます。先夫にたいするうらみにしろ、にくしみの念にしろ、子どもにかくすことができるものです。」(P. 311)

こういったマカレンコの指摘は今日の日本でも通用する親の子供に対する最小限の義務としてとらえられるであろう。

(3) ステパンの13人の子どもたち

ステパンは腕のいい鍛冶屋である。彼と妻のアンナには13人の子どもがいる。子どもの構成と家庭での役割分担を示すと次のようである。

オクサーナ	(女)	一家事担当
ヴァーニカ	(男15才)	} 経営班
ヴィーチカ	(男)	
セミヨン	(男)	
ヴァーニュシカ	(男10才)	
ヴーシカ	(男8才)	} お使い班
リューベ	(女7才)	
コーリヤ	(男6才)	
マルーシャ	(女5才)	

ヴェーラ	(女4才)	} チビッコ班
グリーシカ	(男)	
カーチャ	(女2才)	
ベーチャ	(女2才)	

13人の子どものいる家庭と聞いただけで、ゾットするのが普通ではないだろう。

それは、その当時のソビエトでも同じであったらしく、この家族がやってくることを聞いたコロニーの人たちは、増加係数という理論を持ち出して、「13人目はわずか8.3%だから、気にすることはない。」といって大笑いする。(P. 43)

しかし、読みすすんでいくと、マカレンコがこの家庭を理想の家庭として選んだ理由、子どもが多い家庭の良さがわかってくる。

なぜ、こんなに素晴らしい家庭が生まれたのか。それは、父親の生活に対する姿勢と、母親の細やかな愛情あふれる心づかいの結果だと思われる。

たとえば、父親の生活に対する姿勢があらわれている典型的な場面として、次のようなものがある。

マカレンコが、生活が大変だろうから夜の残業をしてはどうかとすすめた時、ステパンは次のように断る。

「工場のために必要だ、といえば、それだけのことです。でもわたしの子どもたちのためだったら、必要ありません。子どもたちにとって父親がちゃんとした人間であることが必要です。たまに見かけますが、人間じゃなくて、ウマみたいな人がいます。その連中ときたら、目はかすみ、背はまがり、神経はすりきれ、ネコの泣くほどの涙もないくらい、貧しくなっています。こんな父親になって、なんの役にたちます？ 食べるだけじゃありませんか。こんな父親なら、はやく墓にはいったほうがましです。」(P. 52)

なんと明確な言葉ではないだろうか。ウマのように働き、家庭をかえりみない父親が多い現代の日本にとって、新鮮に響いてくることを悲しまざるを得ない。

この父親の考え方は子どもにも次のように伝わっている。

ヴァーニャが叔父さんの所の下宿して学校へ通う話がもちあがったとき、ヴァーニャは次のように断る。「おやじをすてる方がいいことでしょうか？ いいとおっしゃるんですか？ あそこに行っても、何もいいことはありません。なにもかも、もっと悪いですよ。ただ、食ってるだけ、それだけです。でも、うちのほうは、ずっといい。みんな集まって、腰かけ、にぎやかなこと！ おやじさんも陽気だし、おふくろだって！ 男の子も女の子もみんないい連中です。」

(P. 59) 前の父親の働くことの意味について語った言葉と重なってくる。父親は「ウマのように働くことの無意味さ」を語り、息子は「食ってるだけの無意味さ」をはっきり語る。

一方、母親の細やかな愛情のあらわれているものとしては、次のようなものがある。

引越しの行列でマカレンコのみた子どもたちの様子は次の通りである。

「どの子の頭もバリカンでかってあり、陽にやけて顔はみんな清潔で、はだしの足でさえ、きょうのほこりがついているだけでした。バンドをしめているものはありませんでしたが、サラサのルバーシカのえりもととはきちんとボタンをかけ、どこも、すこしもさけたりほころびたりしたところはありません。ただ、ラッパをもった男の子のひぎに、つぎがあてであるだけでした。」(P. 46)

また、マカレンコがステパンの家の夕食に招かれた時には、テーブル掛けはないけれども、白木のテーブルが、自然の美しさで光っておりベチカには白いカーテンがかかっていた。(P. 60)

このように、子どもたちの服装にしても家の調度品にしても、ぜいたくなものはないけれども気持ちよく生活するための細かい配慮がなされていた。

夕食に招いたマカレンコを家族全員でもてなし、アンナは食卓につく時、台所用の黒い前か

けをはずし、明るいピンク色のものに変える心づかいをする。

マカレンコは、この時の印象を次のように書いている。

「夕食をともにするのですが、こんなに一家そろってのもてなしを受けたこと、はじめてです。たいてい子どもたちはどこか家庭のすみっこに追いやられていて、ごちそうといえはおとなのあいだでだけでした。」(P. 62)

ステパンには、できうる限り、子どもたちも含めて全員で行動しようという姿勢があった。それはこの夕食でも明らかであるが、家事労働の様子にも、家を増築するときの様子にもあらわれている。それは次の通りである。

ヴァーニカは夕食のためのキノコを集めていた。夕食の時、年上のヴァーニカは、チビちゃんたちのテーブルのはしっこに坐り、4才のヴェーラがスプーンでトントンやり始めた時、やさしくたしなめた。アンナがマカレンコと夫と自分の皿にじゃがいもを分けると、さいはいをオクサーナにわたした。(P. 61~62)

ステパンが家のそばにヴェランダをつくり出した時、工場で働いているステパンに代わって工事のさいはいはヴァーニカがにぎっていた。

下のヴァーニシカは一日中、古い板からくぎを抜く仕事にかかりつきりだった。それでもくぎが足りなかったため、ヴァーニカは材料をあつめているお使い班に、「くぎのついているやつはヴァニシカの所へ持ってゆき、つぎのないのだけ、ぼくによこしてくれ」と命令する。お使い班の隊長のヴァーシカ(8才)は、自分では出かせず「チビ」の代表のマルーシャ(5才)を動員して、くぎの有無を調べさせる。

(P. 49) このように、夕食での場面やヴェランダ建設の場面では子どもたちが、チビッコも含めて、みんなで役割分担しながら生き生きと働いている様子が描かれている。

ステパンが、できうる限り子どもといっしょに行動するという姿勢の根底にあるのは、子供を家庭生活を建設していく共同者としてみてい

くという考え方であろう。そのことは、子どもをしかったり、おこったりする対象としてではなく、家庭の重要な構成員としてあつかっていくことである。それはステパンの次の言葉にもあらわれている。「子どもが泣いたり、わめいたりするのは、ただ神経のせいですよ。あんたらは、自分たちだけが神経をもっていると思っていなさが、子どもにだってあります。」(P. 51)

この家庭のその後の姿をマカレンコは次のように書いている。

「それから数年がたちました。ヴェトキン一家はわたしの眼前で暮らし、発展し、ゆたかになりました。かれらのおたがいのかたい結合は、すこしもくずれませんでした。またあけくれ苦しい生活に追われながらも、そんな表情は決して見せませんでした。」(P. 68)

この一文の中の「苦しい生活に追われながらも、そんな表情は決して見せませんでした。」というくだりには、マカレンコがその著書の中で時々使っている「楽天主義」「長調の調子」がよくあらわれている。このように、ゆったりと子どもたちを自む心のゆとりの重要性を再認識する必要があらう。

おわりに

以上、三つの家庭と、それに対するマカレンコの考えをとりあげてきた。理想的な家庭をつくりあげるには、まず第一に親自身が自分の生き方をはっきりさせること。何のために働き、何のために生きるのか。食べるための人生、子どものための人生を生きるのではなく、自分の人生をしっかりと生きることが必要である。

第二に子どもを、一個の人間として尊重すること。この二つの観点が家庭において、親として子供を今日する時に必要である。さらに、学校における教師としても、欠いてはならない基本的姿勢であろう。

教師は、自分が何のために働いているのか、何のために教えているのかをはっきりさせる必要があるだろう。また、生徒を一個の人間とし

て尊重する姿勢からは、体罰は起こり得ないし、教師が生徒を大切に思い、愛情を注いでいる所には、いじめなどが起こるはずがないと思うのである。

3. 家庭における性教育論

はじめに

マカレンコは「親のための本」第17章の中で家庭内での性教育について触れている。性教育の問題は親であれば古今東西必ず直面する問題であり、家庭内において親が抱えなければならない大きな問題のひとつである事は間違いあるまい。家庭というものが社会の基礎集団として成立し、機能を有するためには、様々な点において目的を持った方策が取られなければならないが、性教育の部分に関してもそれは同じであろう。性情報が巷に反乱し、多くの子ども達がその中にどっぷりとつかっている現代は、反面多くの性教育の書物も手に入る時代であり、親も子も知ろうと思えばすぐに必要な性情報を、あるいは性教育の情報を知る事ができる。こうした現代と比べれば、マカレンコの時代は勿論隔世の感があるし、何よりもマカレンコは性教育の専門家ではない。しかし、集団主義の立場からすれば、家庭という集団における性教育という視点はマカレンコの専門であり、マカレンコの考え方は、親が直面する問題の解決への指針となり得るはずである。そこで、以下、マカレンコの考え方を紹介し、検討していくことにする。

(1) アレクサンドルとナージャ

まず、「親のための本」第7章の概要を記しておきたい。

アレクサンドル・ヴォールギンは13才の男の子。学校で詩の授業の時プーシキンの詩を習う。その時、その詩の中に何か性的な意味が込められていることに気づいたアレクサンドルは、その事を執拗に先生に質問して先生を困らせる。

この事は同じ学校に行っていた姉ナージャの口から父親に知れたが、父親はすぐにアレクサンドルを呼んで話をする。この話の中で父親はアレクサンドルに次の三点を言う。ひとつは男はくだらないおしゃべりをしてはならないという事、ひとつは生活の中には秘密な事があるのであり、知っていても白日のもとにさらすものではないのだという事、もうひとつはプーシキンはすばらしい詩で美として性を語っているのであり歪曲して理解してはならない事である。アレクサンドルも了解してこの件は落着する。

姉ナージャは17才であった。ある日、夜と遅くまで男と二人で出歩いて帰って来るという事をしでかす。この時母親がナージャと話をし、ナージャに次のような事を言って聞かす。愛情というものには十分吟味する必要があるという事、女としての価値・プライドをしっかりと持つ必要があるという事、ナージャに信頼を持っているという事などである。ナージャの件もこれで済むのだが、アレクサンドルは学校の友達からナージャの事を告げ口され、事の真相をナージャから直接聞こうとしてナージャを傷つけてしまう。父親はアレクサンドルのこうした行為に対して、ナージャに直接聞くべきではなかったし、余計な事を言わずにすべての事について理解を持つようにしなければならないと言って聞かせる。この後、アレクサンドルは友達の言動に惑わされない人間として成長していく。

話の展開は以上のようなものである。この他、性教育に関する理論的な記述もあるが、マカレンコは「子どもの教育について」という講座の中の「性教育」の項目で理論を述べているので、重複している事もありここでは特に触れない。この逸話に出てくる13才の男の子と17才の女の子の引き起こす事件、それも性に関わる事件に対して親がどう対処したかという点がこの章の主眼とされるべき点であろう。

13才のアレクサンドルは性に関心を持つ年頃であり、興味本位に性質をはやしたてたい男の子である。思春期の入口にいる男の子は勿論い

ろんな問題を巻き起こすだろうが、マカレンコはプーシキンの詩に関する件とナージャへの対応の件の二点について特に取りあげている。そして、それらに対する親、それも父親であるが、父親の対処の仕方の特徴的な点は生活上の秘密を理解せよという諫言であろう。マカレンコはこの言葉を性教育上かなり重視しているように見受けられる。この問題はこの章の大きな問題点として指摘できよう。

また、ナージャは17才の女の子である。興味本位な性への接近から、しつとりと落ち着いた愛への憧れの芽生えへと変化していく年頃であろうか。マカレンコはどちらかと言えば、妊娠といった性に関して深刻な様相を呈する段階の問題ではなく、そこに至る初歩的な段階を提示している。夜遅く男と二人で出歩いたという事がどれだけ重い意味を持っているかを母親をして語らせている。この母親の対処の仕方の特徴的なのは、ナージャに対する信頼感である。一人の人間として、独立した人格として扱っていると言う事もできよう。

以上の二点について、マカレンコの家庭における性教育に関する考え方を、彼の理論とも絡めて検討していくことにする。

(2) 生活の中の秘密

マカレンコはアレクサンドルの口から友達に向けて自分の父親の言葉を語らせている。

「こういうんだよ、いいかい。生活のなかには、ああした、秘密なこともあるって。そしていうんだ。人はみんな知っている、男も女も。それはちっとも不潔なことじゃないのだけど、ただ秘密なんだって。だれだって知っている。それどころじゃないだろ？知ってるってことは、目に出さないってことだ。これが文化だっていうんだ。」(『マカレンコ全集第V巻』P. 207—以下ページ数だけを示す)

この言葉は、性に関する事は生活の中でも秘密な部分だから軽々しく口に出すべきものではないと言う事を言っているのだが、マカレンコ

の考え方において、この“秘密”には二つの段階があるようである。ひとつは親が子どもにとる立場としての“秘密”である。マカレンコは「子どもの教育について」で次のように記している。

「子どもがたまたまたずねたからといって、“子どもの生まれる秘密”を性急にうちあけたりする必要はすこしありません。そういうことをきいたからといって、とくべつな性的な好奇心などがあるわけではないし、秘密にしておいたところで、子どもは苦にもしないし、悩みもしません。」(P. 363)

性の問題を子どもに対して秘密にしておくというマカレンコの考え方は、次のような理論に基づいている。即ち、子どもというのはさまざまな人生上の問題を知らないのであって、性の問題もそのひとつにすぎない。個々の問題はそれを知る時機があるように、子どもが聞いたからと言ってこと細かに教える事は意味がない。特に性に関する問題をあまりに早く子どもに知識として与えてしまうと、子どもはいらぬ好奇心や想像力をかきたてて、まだその時機でもないのに性的環状の口火をきってしまうのだ、というのである。

赤ちゃんがどうして生まれるのか、どこからやって来るのかと言った素朴な疑問に対して、コウノトリを持ち出すのはともかく、親の立場として、時機が来るまで秘密を保っておくというのは必要な事のように思える。それにマカレンコが言うように、時機が来て本当に知りたければ子どもは友人や書物などからちゃんと知識を得て来るのである。

しかし、現代において性の問題を子どもの前で秘密にしておくのは、誤った性情報の氾濫する中では好ましくないという考え方もある。例えば、坂本玄子氏は『性を考える』⁽¹⁾の中で、性は神秘的ものだから安易に人々の口に出すのを控えてはいけないという投書をした父親に対して、「今の子どもたちがかつての大人たちとまったくちがう条件で育ち、人間的な愛を育まれるこ

との少ない現実にあることを、このお父さんは「ご存知なのだろうか」と父親の態度に疑問を投げかけている。テレビ、雑誌、友人などから、知りたくなくても情報の入って来る時代であれば、誤情報が入る前に正しい情報という老婆心であろう。いや、それは老婆心などではなく、現実には直面したもっと厳しい切実な思いなのだろうが、性というものが実は生活の中では秘密なものであり神秘的なものだという立場から、子どもの小さい間は、親が家庭内で性に関する事を秘密として押し通すという態度があってもいいように思える。

では、いったいいつ秘密を明かすのだろうか。マカレンコの「子どもの教育について」の記述は“子ども”とか“息子”とかいった漠然とした用語があるだけで、具体的に何才ぐらいの子を想定しているのかわかりにくい。ただ、マカレンコは秘密を明かす明かさないといい方はずせず、次のような言い方をしている。これは先にあげた“秘密”のもうひとつの段階である。

「人間の生活の多くの面には、人目にふれない秘密があり、このことを人にさらけだしたり、世間一般に見せびらかしたりしてはならないということに慣らすことがたいせつです。人間の内密の生活にたいするこういう態度が子どもに教育され、いくつかの事柄についてかしくも沈黙をまもる習慣が子どもにできてはじめて、——つまり、もっとあとになってからですが——性生活についても子どもとはなしあうこともできます。」(P. 364)

これは、子どもが世間にとる態度としての“秘密”である。つまり、性質上の秘密を秘密として守る態度を持たねばならないというのである。性の問題は世間に対して秘密としておかなければならない問題なのであり、軽々しく口にすべきものではないし、人々の目の前にさらすものでもない。子どもに性の問題を生活の中の秘密として理解させ、それを守る態度を養わせる事、この事が性教育を瑣末な性知識の伝達に終わら

せず、もっと大切な性生活そのものへの対話へと結び付けさせるのだと言う。

マカレンコのこの考え方、人間生活の多くの秘密を他人に見せびらかさないことに慣れさせるという事が子どもと性生活について話し合える事に結びついていくという考えは、これ以上の説明がないので理解しにくいし、いったい話し合える年齢とは何才のことなのか不明確である。しかし、これは恐らく、軽薄でなく謙虚さを身につけ、秘密なものへの畏敬といったものを感じさせることが、性に対しても誠実で真摯に接する人間に成長する事と結びつくとマカレンコが考えるからであろう。そういう意味においてマカレンコの視点は明らかに性そのものではなく、性をも含んだ人間の訓育全体にある。従って、アレクサンドルがプーシキンに込められた性的な内容について軽はずみな口をきいた事や、姉の行動への好奇心から軽率のあまり姉を傷つけた事に対する父親の対処の仕方は、性そのものを否定する類のものでもなく、真実をあからさまに語るものでもなかった。人間として性の問題に対してどう振る舞っていかなければならないのかという、その処方箋を教えるものであった。これは明らかに集団の一員として、他者と関った時に身につけておかねばならない処し方と言えよう。マカレンコの理論に即して言えば、アレクサンドルの事例は秘密を「世間一般に見せびらかしたりしてはならないことに慣らすこと」(P. 364)の大切さを教える段階の事例であろう。

(3) 信頼

ナージャの事例はマカレンコの理論に照らし合わせると、どうも「性生活について子どもとはなしあうこと」の出来る段階の事例であるように思える。「親のための本」第7章で母親はナージャに次のような事を言う。

「あなたはこうな子なんだし、自制心もあなたはもっている人ですからね。わたしはあのことではあなたを悪くはとらないの。わたしは

あんなつまらぬことをすると思ってもいなかった。わたしは、あなたにはあのプライドというもの、女の価値が十分あると思っていたの。ところがあなたは二度男と逢っただけで、もうその人と夜の一時まで散歩したでしょ。」(P. 215)

ここでは母親は強い口調で非難したり叱責したりしていない。むしろ信頼しているからもうつまらない事などしないはずだという信頼感を漂わせている。愛に憧れ、愛の幻影の中にいる女の子ナージャに対して、こうした対処の仕方が万全の策であり、深みにはまっていく事から回避させ得るものであったかどうかは、そこまで記されていないので定かではない。しかし、恐らくマカレンコになっては、アレクサンドルに対してなされたような性に関する教育が小さい頃から成されていれば、これだけで十分大切な事が何であるかを彼女に気づかせることが出来たと言えるのであろう。従来からしっかりした性教育が成されていなければ、とてもこれだけの言い方では無理に違いない。

そこで、ここでマカレンコの性教育の考え方の全体像を「子どもの教育について」によって一度押さえておいてみたい。

マカレンコにとって性教育の目的とは「子どもたちが愛情をもとにしてはじめて性生活をたのしむことができるように、また自分の快楽と愛情と幸福を家庭を通じて実現するように、わが子を訓育しなければなりません。」という点にある。そしてそのための手段としては、性教育をそれだけ独自の問題として考えず、他の多くの教育活動と絡めて考え事が必要で、「正しい性教育は、人格の陶冶とおなじく、一般に家庭の生活が正しく組織されているならば、また親の指導のもとに真のソビエトの人間が成長しているならば、もちろん、いつでもできることなのです。」と言う。また、「正直、働く能力、誠実さ、率直さ、清潔の習慣、真実のことを言う習慣、他人を尊敬すること、他人の感情と趣味を尊重すること、祖国への愛、社会主義革命の理念にたいする忠誠を子どもに教育することが、

性関係のことでもその子を教育することになるのです。」と指摘する。

こうした観点から、マカレンコは性教育の具体的な方法として二点あげている。ひとつは、「実例」が大切だと言う。つまり、「父と母が心から愛しあい、たがいに相手を尊敬し、助けあい、いたわりあい、ゆるされるかぎり、愛情と愛撫をはっきりとあらわすこと、そうしたこと、子どもの目の前で、生まれたときからなされていると、それはもっとも力強い教育的要因となり」得るのだと言う。もうひとつは「一般的に愛情を子どもに育てること」が重要だと言う。つまり、「性的でない愛情——友情、子ども時代に体験されるこの友愛の経験、特定の人になくはない思慕の体験、子ども時代から教育された祖国愛——これらはすべて、友人としての女性にたいする本来の高い社会的な態度を教育するためにもいちばんいい方法」なのである。

この二点の他、細かい点として、家庭に正しいレヂムがしっかり出来ている事が大切だとか、子どもに雑務と仕事を適度に与える事やスポーツをやらせる事が性教育の条件として大事だと指摘している。そして、先にアレクサンドルのところで触れた生活の中にある秘密を見せびらかさない事に慣らすという点もマカレンコの理論の中では大きな比重を占めるものである。(以上、Pp. 360～367)

マカレンコのこうした性教育理論⁽²⁾について、柴田義松氏は『性の発達と教育』の「監修者のことば」の中で「マカレンコの教育論は、たしかに少年少女たちの正しい生き方を教示しているものの、性教育論としては、道徳的側面にのみ片寄っている。」と指摘している。この評言は必ずしもマカレンコの性教育論そのものに対して直接向けられたものではないようであるにしても、マカレンコの理論の特徴の一端を言い得ているように思える。ただ、「道徳的」という言葉の意味が何如なる意味なのかははっきりせず、例えば性道徳的側面に片寄っているといった意味だとすれば、これはマカレンコの性教育の方

針と少し差違があるように思える。マカレンコが性道德について子どもに言及するのは子どもがかなり大きくなってからである。それ以前の子どもにあつては、性道德といった限定された範囲ではなく、むしろ、人間として取るべき態度、生活の基本的な習慣づくりに主眼がおかれているのであり、その意味で「道德的」と言うのであれば肯定できよう。何よりも、マカレンコの理論は性教育に対する基本理念の提示として様相を呈しているのである。何もかも性に関する事をさらけ出すといった性教育の方法を批判する立場から、性教育の目的、方法について論じたのが「子どもの教育について」の「性教育」の項目であつた。「親のための本」第7章のアレクサンドルとナージャがその具体的事例なのである。

しかし、具体的に言っても、例えばマカレンコが「正しい性教育」は「家庭の生活が正しく組織されているならば」「いつでもできる」(P. 307)と言うところの、この「正しく組織」という言葉の意味する中身は不明確なままである。こうした例は他にも多く、細かな点は不明確であっても、むしろ性教育として求められるべき柱を打ち建てようとしているように見受けられるのである。

ただ、「正しく組織」された家庭というものを他の文中から読み取るに、レジムが家庭内にしっかり出来ていて、子どもが家庭内の仕事を責任持ってこなし、両親が子供の前で愛情を見せていて……といった家庭なのであろう。こうした家庭が基本にあればこそ正しい性教育は行なえる。つまり、ナージャにあつても、母親が信頼を込めた注意をすればそれで事足りるのではないだろうか。信頼した物言いをする事が出来る事、あるいは信頼関係が成立している事、やはりこれが性教育にあつて大切なことと指摘されよう。母親はまた「愛情をしらべなければだめ、人には自分は愛していると思えるの、ところが実際はそれはほんとうじゃない。」(P. 214)と言う。この意味にもナージャは素直に耳

を傾けている。性急に自分の愛に一途に行動するのではなく、よく自分の愛を吟味する事の大切さを語り合っていると言える。この語り合えると言うことが子どもが大きくなってくれば大切なのであり、マカレンコは「性生活について子どもとはなしあう」段階に来れば「性衛生の問題、とくに性道德の問題についても語り逢わなければなりません」(P. 364)と指摘する。ナージャの事例はこうした段階の事例として理解する必要があるだろう。

おわりに

柴田義松氏は前述の本で、ソビエトの性教育史において、1930年代の児童学による生物主義的偏向が批判される中で、倫理的性格の強いマカレンコの言説がもっぱら引用されたという事を指摘している。こうした性教育史におけるマカレンコの役割、独自性という視点に関してはここでは視野に入っていない。ただ、指摘し得るのは、マカレンコの考え方が現代の性教育書の中に散見しているという点である。例えば、『スポック博士の家庭教育』⁽³⁾には次のようにある。

「どんな子供にとっても、性教育の最も重大な面は、彼らが時折耳にする事実の説明ではなくて、両親の間や両親と自分との間の全体をおおう関係について、彼らが心の中に持つ理解だと、私は確信しています。両親が互いに愛し合い、尊敬し合い、肉体的ないたわりを適度に示し合えば、子どもたちは根底にある基本的なイメージを理解するようになるでしょうし、そのイメージは彼らが成長するにつれて、彼らを導く強力な道案内となるでしょう。」

この「両親が互いに愛し……」以下の文章はマカレンコの考え方と同じである。こうした性教育書もある反面、こと細かに性に関する事例を並べた性教育書もある。現代にあつてはそれこそ雑多な性教育書があるのだろうが、どうもここにあげたような、性教育における家庭内での両親の姿の役割について言及した性教育書は

以外に少ないように思われる。それは、やはり性教育の問題が、性知識の伝達ではなく、性を含めた人間教育として捉えられるようになっていとは言え、家庭を集団として捉えるという観点が希薄なせいではないだろうか。

崩壊した家庭で性教育は成立しないだろうし、崩壊していなくても集団としてまとまっていなければ、目的を持った性教育は無理であろう。そういう点において、マカレンコの性教育理論は、理想的な家庭像を表裏一体を成しているものなのである。ところで、「子どもの教育について」の「性教育」の項目にはまだまだ示唆に富

む部分が多くある。ここでは細かくなるので全部を紹介できなかったという事を最後に記しておきたい。

〈注〉

- (1)坂本玄子著『性を考える』 農文協 1986年。
- (2)コレソフ、セリヴェロワ著、柴田義松訳監修『性の発達と教育』 新読書社 1981年。
- (3)ベンジャミン・スポック著、曾野綾子・鶴羽伸子共訳『スポック博士の家庭教育』 1972年。